

附属特別支援学校と附属幼稚園・小学校・中学校との交流活動の実践[†] ～幼児児童生徒の変容と教員へのアンケート調査を中心に～

北島 英樹・小野 直子*

秋田大学教育文化学部附属特別支援学校

姫野 完治**

秋田大学教育文化学部

秋田大学教育文化学部附属学校園は、同敷地内に四校園が隣接するという全国的にも数少ない教育環境に恵まれている。そこで、本研究では、この恵まれた環境を生かし、特別支援学校が幼稚園、小学校、中学校とそれぞれ継続的に交流活動を行った成果について検証する。

キーワード：大学附属学校園、交流活動、ノーマライゼーション、特別支援学校

I はじめに

今日、障害のある人もない人も、互いに支え合い、地域で生き生きと明るく豊かに暮らしていける社会を目指すノーマライゼーションの理念に基づいた「自立と共生のまちづくり」が求められている。また、平成21年3月に告示された各校学習指導要領でも交流及び共同学習の重要性と積極的な推進について示されている。

幼児期から学齢期段階の子どもたちにとって、障害がある人でも普通の市民と同じ生活ができるような社会や環境づくりの必要性（意義）について学ぶことは、大切な学習の一つと考える。

本学附属学校園は、幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校の四つの学校園が一つの敷地内に隣接されるという全国的にも数少ない立地環境に恵まれている。これまでも本校園では、この恵まれた教育環境を生かし、四校園間での交流活動の推進を図って

きた。今回、四校園交流の目的を「幼児児童生徒及び教員間の交流を通して、附属校園の仲間として新たな出会いや気付きを促し、障害がある児童生徒や年齢差がある友達を理解するきっかけをつくる」として、平成19年度から平成21年度の3年間取り組んできた。本研究では、幼稚園、小学校、中学校と特別支援学校がそれぞれ継続的に交流活動を行った成果と今後の交流活動の在り方について検証することとした。

II 研究の方法

研究にあたり、各校園と学部教員代表による研究委員会を組織し研究の進め方について検討を行ったほか、交流活動の推進にあたった。

研究委員会のメンバーは以下の通りである。

○研究計画、交流計画

- ・特別支援学校（教頭、教務部、交流担当、地域支援部）
- ・幼稚園（教頭、担当者）
- ・小学校、中学校（教頭、教務主任）

○助言

- ・附属教育実践総合センター（現：附属教育実践研究支援センター）
- ・障害児教育講座

2012年2月14日受理

[†]Action of Exchange Activities with Akita University Attached Special Support School, and Attached Kindergarten, Elementary School and Junior High School

*Hideki KITAJIMA and Naoko ONO, Special Support School, attached to Akita University, Akita

**Kanji HIMENO, Faculty of Education and Human Studies, Akita University, Akita

表1 交流のタイプと内容・ねらいについて

タイプ	ねらい	主な内容等
四校園合同交流	新たな出会いや附属校園としての仲間意識を促し、障害がある児童生徒や年齢差がある友達を理解するきっかけをつくる	四校園全ての校園で交流（合同あいさつ運動等）
一校対一校交流	同一校同士、複数回継続して交流を行うことで、相手を身近に感じたり理解したりする	一校園同士の交流（サツマイモ苗植え交流、生活科「ふゆとなかよし」等）
行事交流	互いの学校行事に参加することで、他校の様子を知ったり、出会いの場をつくったりする	学校行事における交流（竿燈集会、はとの子発表会、DOVA FESTA 等）
一学年抽出追跡型交流	日常的に交流することで、同年齢の児童生徒を知ったり理解を深めたりする	一学年もしくは一クラス同士での複数年にわたる交流（同年齢集団による授業参加型の継続した交流）

○意識調査

- ・附属特別支援学校地域支援部
- ・附属教育実践総合センター（現:附属教育実践研究支援センター）
- ・大学生

なお、交流内容やねらいに応じて交流のタイプを表1のように四つに分類した。

1 幼児児童生徒の様子と変容について

交流活動が行われる度に、各校担当者より交流活動の記録を提出してもらうこととした。

記録には、「活動内容・交流タイプ」、「実施期間」、「交流校園」、「担当者（校園名）」、「活動の振り返り（幼児児童生徒の姿、つぶやき等）」の他、「今後に生かせること等（担当者の感想を含む）」が記載された。また、各校の交流計画担当者教員（1名）からは、四校園交流に関する報告書として、「交流の時期や内容」、「交流を通して良かったと感じられたこと」、「交流するときに苦労したこと・工夫したこと・留意したこと」、「四校園交流活動をより活発にするために」の項目について、全体的な報告を行ってもらった。

2 教員の意識変容について

交流活動における教員意識について、初年度（平成19年度）と最終年度（平成21年度）に調査を行った。なお、教員の異動等があったため、本研究では平成21年度に行ったアンケート調査の結果を分析した。

研究の対象は、附属幼稚園園児129名と教員10名、附属小学校児童624名と教員32名、附属中学校生徒

441名と教員27名、附属特別支援学校児童生徒60名と教員30名である。（平成21年度）

Ⅲ 結果と考察

1 幼児児童生徒の様子と変容について

ここでは、各校担当者から提出された四校園交流実施記録（抜粋）を示す。

1) 四校園合同交流「四校園あいさつ運動」(図1)

①活動内容

中学校生徒会役員と特別支援学校児童生徒会役員が、朝の8時からの10分間、幼稚園の前に並び、登校する児童生徒に朝のあいさつを行う。

②実施時期

5月、9月、10月に1週間ずつ行う。

③交流校園

中学校、特別支援学校

④児童生徒の様子

<平成19年度>

- ・期間の半ばを過ぎると、あいさつを返してくれる児童生徒の数が増えた。
- ・生徒会の役員たちの、あいさつをする声が日増しに大きくなっていった。

<平成20年度>

- ・最初は、お互いにどのように接したらよいかわからず戸惑っていたが、回数を重ねることで、徐々にふれあう様子が見られた。

<平成21年度>

- ・昨年に引き続き活動に参加する生徒もあり、活動は順調に行われた。
- ・はじめは、互いにとまどう様子も見られたが、徐々に打ち解けることができた。

同じ場を共有して、あいさつ運動という一つの



図1 四校園あいさつ運動



図2 サツマイモ苗植え交流

活動を一緒に行うことで、互いを「知る」機会とすることができた。

2) 一校対一校交流「サツマイモの苗植え交流」 (図2)

①活動内容

特別支援学校の畑と一緒にサツマイモの苗を植える。

②実施時期

5月中旬

③交流校園

幼稚園年長、特別支援学校高等部

④幼児生徒の様子

<平成19年度>

- ・はじめは、お互いに緊張した様子が見られた。
- ・自分からなかなか話しかけることができない高等部生徒もいたが、教員が間に入ったり、教えるように促したりすると、関わることもできた。
- ・向かい合って苗植えをすることで、少しずつ話をする姿が見られた。

<平成20年度>

- ・はじめは、お互いに緊張した様子が見られた。
- ・高等部生徒が幼児に植え方を教える活動を3回ほど繰り返したことで、後半には、幼児に伝わるように言葉を選んだり、手を添えて一緒に作業しようとしたりするなど、進んで幼児に関わる高等部生徒の様子が見られた。

<平成21年度>

- ・高等部生徒が進んで「よろしくね」などと優しい言葉で幼児を迎え、幼児の緊張もほぐれていた。

- ・高等部生徒が幼児に「苗、持ってる?」と言葉を掛けながら苗を渡し、幼児が自然に「ありがとう」と答える場面が見られた。
- ・幼児は安心して活動に向かい、高等部生徒は年上として丁寧にかかわろうとしていた。

高等部生徒が幼児に「教える」、「手伝う」というスタンスで進めたことで、幼児たちは、高等部生徒を障害のある人という意識ではなく「すごい」、「かっこいい」など、頼もしいお兄さんとお姉さんという存在として感じていた。

3) 行事交流「竿燈集会」(図3)

①活動内容

特別支援学校の生徒が竿燈まつり参加に向けて練習をしている演技とお囃子を幼児に披露したり、体験してもらったりする活動。

②実施時期

7月中旬

③交流校園

幼稚園、特別支援学校

④幼児生徒の様子

<平成19年度>

- ・竿燈が倒れそうになると、幼児から「がんばれ」という声援が多く聞かれた。
- ・体験場面では、特別支援学校生徒が手を添えたり、一緒に太鼓をたたいたりすると、幼児は、照れながらも演技やお囃子を楽しんでいた。

<平成20年度>

- ・竿燈が入場すると、幼児から「すごいね」、「大きいね」という声が聞かれた。



図3 竿燈集会

- ・初めは恥ずかしそうにしている幼児がいたが、特別支援学校の生徒が優しく手を添えたり、一緒に太鼓をたたいたりすると、「太鼓をたたくのがおもしろかった」、「竿燈を自分で持てたよ」など満足している様子が見られた。

<平成21年度>

- ・幼児たちは数日前からこの行事を楽しみにしており、笛や太鼓を作って鳴らしたり、竿燈を上げたりしていた。
- ・竿燈の演技とお囃子が始まると、幼児から「すごい」、「どっこいしょー」などの掛け声や拍手が自然に起こっていた。
- ・前年度も参加している特別支援学校の生徒の中には、前年度のことを思い出しながら進んで幼児に声を掛ける姿もあった。
- ・竿燈やお囃子を幼児に体験してもらう場面では、特別支援学校の生徒が、そっと手を添えて手伝ったり、幼児の横でお囃子の太鼓と一緒にたたいたりするなど、教員を介さずとも自然に関わる姿が多く見られた。

この交流を通して、幼児たちからは、特別支援学校の生徒の力強い演技やお囃子を「すごい」と感じ、あこがれのまなざしを向けている様子が見られた。それに対して、特別支援学校の生徒たちは、竿燈や太鼓を介して積極的に教えたり手伝ったりするなど、自分たちより小さい幼児を思いやって行動する姿が多く見られた。

4) 1学年抽出追跡型交流について

平成19年度に、担任同士のやりとりがきつ

けとなり、小学校5年C組と特別支援学校小学部5年生による同学年同士の交流が行われた。この同学年同士の交流は、内容や回数が少しずつ変化しながら、3年間進められてきた。以下に生徒の様子を示す。

<平成19年度>

①活動内容

「5年C組と特別支援学校5年生との交流」(図4)

特別支援学校の前庭で一緒に遊んだり、小学校で給食・昼休み・掃除の時間を一緒に過ごしたり、お楽しみ会でゲームをしたりする交流を行った。

②実施時期

年間を通して6回実施

③児童生徒の様子

<1回目>

- ・互いに緊張している様子があった。特別支援学校の児童が教員の後ろに隠れるなどの様子が見られたが、小学校児童からの「一緒に滑り台をやりよう」という誘いに応じ、一緒に遊び、最後には手をつないでいた。

<2回目>

- ・前回緊張していた児童(小学校)やどうしてよいか迷っていた児童(小学校)も、特別支援学校の教員に質問し、アドバイスを受けながら特別支援学校の児童に関わっていた。
- ・特別支援学校の児童から「一緒に遊ぼう」と声を掛ける場面があった。

<3回目>

- ・互いに違和感なく関わる様子が見られた。
- ・特別支援学校の児童が使っている指文字を覚えてやりとりをしようとする小学校児童がいた。

<4回目>

- ・初めて特別支援学校の児童が小学校を訪れたが、すぐに溶け込んでいた。給食、昼休み、掃除の時間を一緒に過ごした。
- ・給食では、配膳から一緒に行った。小学校の児童が、配膳の仕方を特別支援学校の児童に教えていた。
- ・キャッチボールや鬼ごっこ、スタンプラリーなどをして、昼休みの時間を楽しく過ごしていた。
- ・特別支援学校の児童および小学校児童から、楽しかった、もっと遊びたかったなどの声が聞かれた。



図4 5年C組と小学部5年生の交流

<5回目>

- ・はとの子発表会（小学校学習発表会）を特別支援学校の児童が見に行った。発表後、特別支援学校の児童が、「〇〇さん、とても上手だったよ」と、小学校の児童に声を掛けていた。

<6回目>

- ・お楽しみ会を小学校で行った。
- ・ゲームでは、特別支援学校の児童が初めて行うものがあったが、小学校の児童から教えてもらいながら、笑顔で参加していた。
- ・小学校の児童から、「また来年も一緒に遊びたいですね」という話があった。

<平成20年度>

①活動内容

「6年C組と特別支援学校6年生との交流」(図5)

特別支援学校の前庭で一緒に遊んだり、小学校で給食・昼休み・掃除の時間を一緒に過ごしたり、お楽しみ会でゲームをしたりして交流を行った。

②実施時期

年間を通して6回実施

③児童生徒の様子

<1回目>

- ・久しぶりの再会であった。特別支援学校の体育館で一緒に遊んだ（ボール、キャスターカー、絵本など）。時間がたつにつれ、自然な関わりが見られた。
- ・小学校の児童が、特別支援学校の児童の表情を見て、気持ちを知らうとしていた。

<2回目>

- ・特別支援学校の前庭で遊んだ。自由に遊べる環

境と時間をつくることで、児童同士がそれぞれの楽しみ方で活動していた。

- ・小学校の児童がかごめかごめのルールを工夫し、特別支援学校の児童が小学校の児童の名前を覚えられるようにしていた。
- ・一人で遊んでいる特別支援学校の児童がいると、小学校の児童が駆け寄って声をかけ、遊びに誘っていた。

<3回目>

- ・特別支援学校の前庭で遊んだ。
- ・特別支援学校の児童が、「〇〇ちゃん来る?」など小学校の児童が来校することを楽しみにしていた。
- ・名前で呼び合う児童が増えた。
- ・まとめの会では、一緒に遊んだ児童同士が自然と隣り合わせに座り、全員が座るまで談笑していた。

<4回目>

- ・特別支援学校の生活単元学習の発表会に、小学校の児童を招待した。互いに名前を呼び合って、関わり合っていた。
- ・発表後、「人形の動きがおもしろかった」、「もったいないばあさんの言うとおりに、自分たちでできるがあると思った」、「ピアノが上手だった」などの小学校の児童の感想を聞き、特別支援学校の児童たちはうれしそうにしていた。

<5回目>

- ・はとの子発表会（小学校学習発表会）を特別支援学校の児童が見に行った。
- 小学校の児童たちは、発表を見てもらったことを喜び、3日後の発表会に向けて意欲を高めていた。

<6回目>

- ・お楽しみ会を小学校で行った。
- ・名前を呼び合い、自然に関わり合う姿が多かった。
- ・教員が場面づくりをしなくても、視線を合わせてはは笑い合ったり、冗談を言い合ったりしていた。
- ・会の最後には、小学校の児童からは「(特別支援学校の)3人とずっと友達でいたい」という感想や別れを惜しむ姿が見られた。また、特別支援学校の児童からも、「また、〇〇くんと会いたい」という発言があった。



図5 6年C組と小学部6年生の交流

＜平成21年度＞

①活動内容

「中学校1年、特別支援学校中学部1年の交流」
(図6)

②実施時期

年間を通して2回実施

③児童生徒の様子

＜1回目＞「附中学校内体育大会」

- ・中学校の体育大会における学年種目の玉入れに一緒に参加した。特別支援学校の中学部1年生の4名は、2名ずつに分かれて2チームに入り、それぞれ楽しんで参加できた。
- ・小学校のときに交流していた中学校の生徒が、進んで声を掛け、特別支援学校の生徒はとてもうれしそうな表情や態度を見せていた。

＜2回目＞「DOVE FESTA」

- ・中学校の1年総合発表（職業体験コーナー）と家庭部のステンシル体験（コースター製作）に特別支援学校の生徒4名が参加した。
- ・特別支援学校の生徒も無理なく楽しめる体験を、中学校の生徒たちが準備していた。特別支援学校の生徒たちは、小学校からの交流を通して仲良くなった中学校の生徒を見つけ、自らその生徒たちが行っているコーナーを選んで体験していた。

交流の回数を重ねることで、小学校の児童からは、特別支援学校の児童を理解しようとする様子が多く見られるようになっていた。一方、特別支援学校の児童からは、「もっと会いたい」という関わりを深めたいと感じている言動が見られるよ



図6 附中学校内体育大会

うになっていた。互いに中学校（部）へ進学した後は、教育課程上、交流の回数は減ってしまったものの、中学生となった時期に行った交流でも、自然に関わり合える姿につながっていた。また、中学部から入学した特別支援学校の生徒も、学級の友達が中学校の生徒と関わる様子を見て、緊張をしながらも、初めて会った中学校の生徒と楽しくやりとりをしていた。

2 教員の意識変容について

平成19年度から平成21年度にかけて推進された四校園交流の効果を探るべく、四校園の教員を対象として平成21年12月に事後調査アンケートを実施した。アンケート項目は、教職経験年数や附属校園の勤務年数などの教職経験情報、交流教育による児童・生徒へのよさ、交流教育を進める際に教員に必要な知識や役割、子どもへの事前教育等への意識などである。回答者は、幼稚園9名、小学校29名、中学校22名、特別支援学校16名の計76名であった。教職経験年数は、1年～10年が14.5%、11年～20年が50.0%、21年～30年が32.9%、31年以上が2.6%であった。

教員になってから交流教育に携わったことがあるかを尋ねたところ、よくある（18.4%）、少しある（47.4%）、あまりない（15.8%）、全くない（15.8%）という結果であった。特殊教育から特別支援教育へと移り変わり、交流教育も徐々に進められてはいるものの、3割の教員はこれまでに交流教育にあまり携わってきていないことが分かった。

また、交流教育は障害児および健常児にとって、どのようなよさがあると思うか、9項目を挙げて当

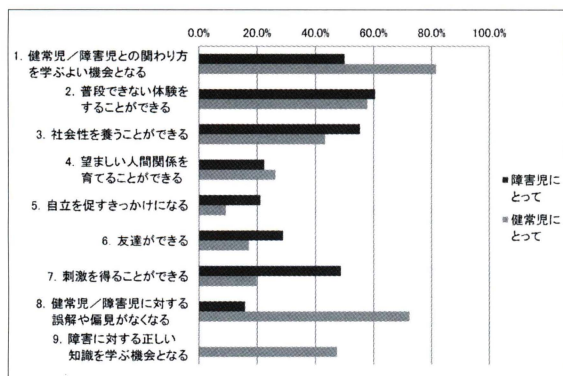


図7 交流教育が障害児／健常児にもたらすよさ

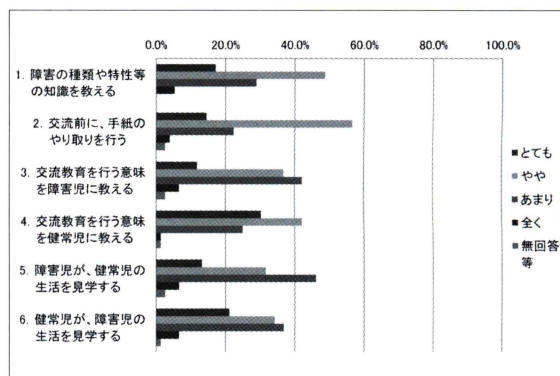


図9 交流教育を行う前に子どもに行うべき教育活動

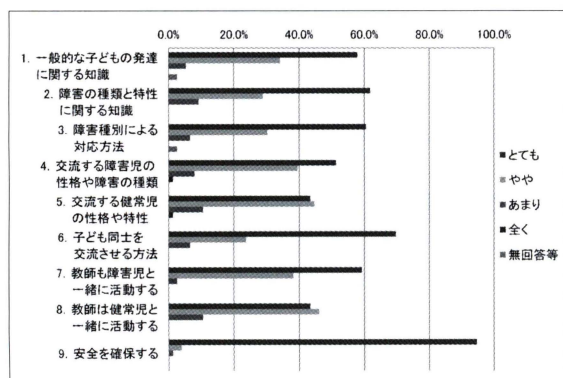


図8 交流教育を行う上で教師に求められる知識や役割

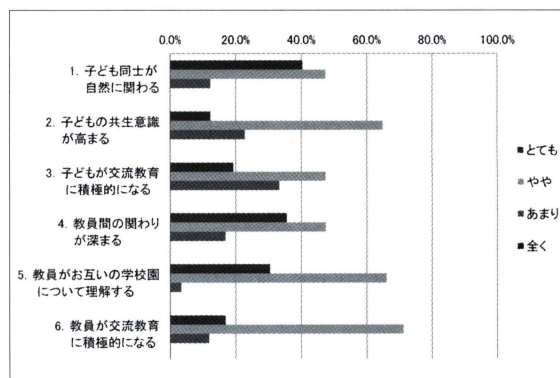


図10 交流教育による成果

てはまるものを選択してもらった（複数回答可）。そうしたところ、障害児と健常児によって異なる点でよさがあると教員は考えていることが分かった（図7）。具体的には、障害児にとっては「普段できない体験ができる」、「社会性が養われる」といった点、健常児にとっては「障害児との関わり方を学ぶ」、「障害児に対する誤解や偏見がなくなる」点で交流教育のよさがあるととらえられていた。しかし、障害児と健常児のどちらにとっても、交流教育を行うことが、各々の自立を促すきっかけや、望ましい人間関係を育てることにはあまりつながらないととらえられていた。健常児が障害に対する正しい知識を学ぶ機会になると回答した教員も半数にとどまっていた。

次に、交流教育を行う上で、教員や子どもに求められる知識や事前学習について尋ねた。図8は、教員に求められる知識や役割を尋ねたもの、図9は、交流教育を行う前に、各教育活動を子どもに対して

行うべきかどうかを尋ねた結果である。全体的に見ると、交流教育を推進する上では、教員が事前に障害種別や特性、様々な知識を理解しておかなければならないととらえられていた。その一方で、子どもたちに事前に教育活動を行うかどうかについて、「とても必要」と回答した割合は高くなかった。むしろ、全ての項目について「全く必要ない」との回答もあった。

ところで、3年間にわたって推進されてきた四校園交流研究プロジェクトは、教員の間でどの程度認知されていたのだろうか。附属四校園において交流教育が推進されていることへの認知度を尋ねたところ、知っていた（96.1%）、知らなかった（3.9%）という結果であった。また、自分自身が附属四校園による交流教育に携わったことがあるかどうかをたずねたところ、よくある（13.2%）、少しある（35.5%）、あまりない（10.5%）、全くない（38.2%）、無回答等（2.6%）であった。附属に来て1年目の教員が14名いたことから無理もない結果と言えるかもしれない。

表2 交流教育を発展させるために必要なこと

- ・教員同士の理解と交流時間の確保
- ・教員が互いの校園の授業・保育を見る機会をたくさんつくり、子ども理解につなげたり、校園の特色を理解したりすることが必要。(特に特別支援学校と幼稚園について分かってほしい。)
- ・交流の意義、必要性を教員一人一人が感じ、それを話し合って共通のものにすること(共通理解)が大事だと思います。
- ・教員間の交流の機会をもつ。
- ・カリキュラムに位置付ける。個人としての交流実践でなく学校としての交流実践。互いの公開研に参加するなど互いの子ども理解。障害児への関わり方を学習する機会を設ける。
- ・附属四校園にしながら、触れ合う機会が全くと言っていいほどない感じがしていました。一緒に活動する機会が増えていくと思います。附小だけで取り組んでいる愛校活動(ベゴニアの苗植え、片付けなど)や学校園での栽培活動など行事や体験活動を一緒に取り組んだり、総合や学活などに限らず一緒に学習活動に取り組んだりする機会を設けることが、まず第一かと思いました。お互いに研究校ということで別の使命もあるのですが、同じ敷地内にあるというメリットを生かして、それぞれの子どもの成長を促したいものです。附小の子どもたちの一部の子は偏見をもったまま大人になっていきそうで残念です。
- ・時間的な問題をクリアすること。日課の違いで交流が難しいと感じました。
- ・幼・小・中学校から交流及び共同学習の推進という視点でもっと計画的・組織的・積極的に働き掛けることが必要。幼・小・中学校において学校経営として重点方針として今後推進されることに期待したい。

が、交流教育の存在自体を共有すること、そして全教員が何らかの形で関与するための工夫が必要と思われる。

交流教育に携わった教員に、関わった主な活動について、その対象や内容、始まったきっかけ、そして交流による成果を尋ねた。ここでは、交流を推進してきた教員が、交流による成果をどのようにとらえているのかを整理した(図10)。そうしたところ、6つの項目すべてについて、成果が「とてもある」、「ややある」と回答した教員が多かった。中でも、「教員がお互いの学校園について理解する」という項目については、9割以上の教員が交流教育の成果として認めていた。

アンケートの最後に、自由記述欄を設け、附属四校園の交流教育を発展させるためには何が必要かを尋ねた。その主なものを表2に示した。

これらの記述を見ると、やはり教員同士の交流が最も大切ととらえていることが分かる。同じ敷地内に四校園が存在しているにもかかわらず、四校園の教員が交流できる機会はそれほど多くない。年に一度の共同研究会や、公開研究会に参加するくらいであろうか。そのため、まずお互いの学校でどのような教育活動を行っているのか等を相互理解し、交流可能な部分を探ることが必要なだろう。表10で「お互いの学校園について理解する」ことが交流教育の成果として挙げられていたことを考えると、子ども同士の交流教育によって、必然的に教員同士の交流

が促進されたと考えられる。

Ⅳ 成果と課題

以上の「四校園交流実施記録」と「交流教育に関するアンケート調査」の結果から、成果と課題についてまとめた。

1 成果

○幼児児童生徒の様子から

- ・短い時間であっても、回数を重ねることで、互いの学校園について知る、理解する機会につながった。
- ・毎年行われる交流活動については、前年度の経験を生かして関わる生徒の様子や、事前にその活動を楽しみに待つ様子が見られるようになった。
- ・「サツマイモの苗植え」や「竿燈集会」など、特別支援学校の中学部・高等部の生徒が幼児に教えたり手伝ったりしながら活動する行事を通して、幼児たちが特別支援学校の生徒の様子を「すごい」とあこがれのまなざしで見つめたり、特別支援学校の生徒が優しく丁寧にかかわろうとしたりする姿が多く見られた。これらの姿は、互いを自然に受け入れて認めたり、思いやりする様子につながっていた。
- ・1学年抽出追跡型交流においては、他の交流に比べ、「友達」として関わり合う姿がより多く見られた。この経験が小学生段階で積み重ねら

れたことの成果は大きく、互いの環境が変わった中学生段階になっての交流活動においても、生徒たちは互いを自然に受け入れ、変わらずやりとりを楽しんでいた。

○教員アンケート調査の結果から

- ・障害児にとって交流教育がもたらすよさについては、全学校の半数以上の教員が「健常児との関わり方を学ぶよい機会となる」、「普段できない体験をすることができる」、「社会性を養うことができる」と答えていた。
- ・健常児にとって交流教育がもたらすよさについては、全学校の半数以上の教員が「障害児との関わり方を学ぶよい機会となる」、「普段できない体験をすることができる」、「障害児に対する誤解や偏見がなくなる」と答えていた。

このように、異動に伴い教員の入れ替わりはあったものの、この3年間で、交流教育のよさとして挙げられた項目も、そのよさを感じた教員も増えていたと言えよう。交流教育のよさそのものを教員自身が感じることができたことは、大きな成果の一つであったと考える。

また、交流教育の成果として、「お互いの学校園について理解することができた」と答えていた教員が非常に多かったことから、子ども同士の交流教育によって、互いの学校園への教員同士の理解が促進されたとも言える。

2 課題

一方で以下のような課題も明らかとなった。

- ・時間の確保が難しいものの、教員同士が互いの幼児児童生徒について情報を交換し合って交流することが大切であると考えている教員が多い。したがって、互いの学校でどのような教育活動を行っているのかなどを知り、交流可能な場面や内容を探っていくことが必要であると考えられる。
- ・大半の教員は交流活動の実施を知っていると答えたが、実際に交流に関わっている教員は多くはなかった。実施した交流教育の内容を共有したり、少しでも多くの教員が関与したりするための工夫が必要だと考える。
- ・各学校の事情で互いの時間を合わせることが難しく、実施できない交流活動がいくつかあつ

た。また、交流活動の重要さは強く感じるものの、日々の仕事に追われ、なかなか交流活動の計画や実施を新しく行ったり、増やしたりすることができないという声も多く聞かれた。日課の調整の仕方などの工夫を検討していく必要がある。

V 今後の四校園交流についての提案

3年間の「四校園交流に関する研究」を通して得られた前述のような成果と課題を受け、今後の四校園交流の在り方について、いくつか提案したい。

1 幼少期からの交流活動による関わり合いの土台づくり

お互いに対する偏見などが少ない、幼いときからの交流活動をできるだけ多く取り入れていくことで、互いを理解して関わり合う土台ができると考えられる。そうすることで、教育課程上、交流活動の時間の確保が難しい年齢となっても、幼少期に関わったことのある経験を生かして、少ない交流の機会にも自然に関わり合うことができると言える（1学年抽出追跡型交流より）。

2 交流活動における教員同士の共通理解を図るための工夫

幼児児童生徒にとっては、事前に障害の特性などを学習する機会を重視するより、交流していく中から感じ取って学んでいく機会を大切にしていけるべきであるという考えが多い。しかし、教員は、事前にある程度互いの生徒の実態について理解しておくこと、互いに共通理解することが必要であるという考えが多く見られた。そのためにも、各校で行っている公開研究協議会に積極的に参加し合うなど、互いの教育現場を見て知る機会を設ける工夫が必要である。実際、交流を通して互いの学校園について理解できたという成果がある。現在定着してきた交流活動を今後広げていくことで、子ども同士の交流によって教員同士の交流が促進され、さらに次の交流につながるという、よいサイクルが生まれるのではないかと考える。

3 各校の行事の中で交流活動の機会を確保できるような内容の工夫

各校の日課の違いのため交流の時間を確保するこ

とが難しいという声が多くあった中、交流の成果として、中学校の行事に特別支援学校の生徒を招待し、部分的に特別支援学校の生徒と中学校の生徒が一緒に活動するなど、行事を活用することで交流の場を設定できたことが挙げられる。行事の中に部分的に交流活動を取り入れること、交流活動の機会の確保につながられる一つの方法としてとらえていきたい。

4 交流活動の周知を図る工夫

交流活動への教員や幼児児童生徒の意識を高めていくためにも、実際に行った交流活動の情報を共有する場が大切であると考え、四校園内の掲示板などに、交流の様子を写真を用いながら掲示するなど、情報を共有する場や状況を工夫していくことが必要である。

5 四校園が同じ敷地内にある利点の活用

今回の交流教育プロジェクトでは、特別支援学校を軸とした四校園交流を推進してきたが、交流教育はそれにとどまらない。本来であれば、幼稚園と小学校、中学校、特別支援学校、小学校と中学校、特別支援学校、中学校と特別支援学校、そして全校園というように、いろいろなパターンでの交流が考えられる。各学校に縦割り班があるように、附属四校園を横断したグループ活動や係活動も可能だろう。運動会や遠足などを共同で開催することもできるかもしれない。四校園が同じ敷地内にあるという利点を生かして、全国に先駆けたノーマライゼーションの理念に基づく教育を実現できたと考える。

VI おわりに

平成21年に改訂された学習指導要領の解説では、幼稚園、小学校、中学校、高等学校、そして特別支援学校とも、「障害のある者となない者が共に活動する交流及び共同学習は、幼児児童生徒とその教育に対する正しい理解と認識を深めるための絶好の機会であり、同じ社会に生きる人間として、お互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学ぶ場でもあると考えられる」と述べられている。したがって、この度の改訂において、各校における「交流及び共同学習」は、障害の有無にかかわらず幼児児童生徒が他の学校の児童生徒と理解し合うための絶好の機会を提供することとな

り、同じ社会に生きる人間として、互いを正しく理解し、共に助け合い、支え合って生きていくことの大切さを学び合えると考えられる。さらに「交流及び共同学習を特別支援学校と小・中学校等が、それぞれの学校の教育課程に位置付けて計画的、組織的に行うとともに、地域の人々などと活動を共にする機会を積極的に設けること」とされ、特別支援学校においては「交流及び共同学習の実施に当たっては、双方の学校同士が十分に連絡を取り合い、指導計画に基づく内容や方法を事前に検討し、各学校や障害のある幼児児童生徒一人一人の実態に応じた様々な配慮を行うなどして、組織的に計画的、継続的な交流及び共同学習を実施することが大切である」とされている。

このように、学校現場ではノーマライゼーションの理念に基づいた「自立と共生のまちづくり」への取組が、今まさに求められているところである。そのためにも、各学校において「交流及び共同学習」を教育課程の柱としてしっかりと位置付け、互いに連携しながら敷地内に各学校が隣接する本大学の附属四校園のメリットを最大限に生かした交流活動を今後さらに推進し、実践を積み重ねていくことが求められている。

謝辞

本研究を行うにあたり、アンケート調査にご協力いただきました秋田大学教育文化学部附属四校園幼児児童生徒・職員の皆様、執筆にあたりご指導いただきました秋田大学教育文化学部障害児教育講座の武田篤先生に深く感謝いたします。

参考文献

- 秋田県教育委員会（2011）：交流及び共同学習にかかるガイド～共に育ち 共に学ぶ～
- 藤森善正・青木道忠・池田江美子・越野和之（2002）：交流・共同教育と障害理解学習.全国障害者問題研究会出版部
- 井谷善則（2000）：ノーマライゼーションへの一つの筋道－附属養護学校と附属学校園のあり方にかかわって－.大阪教育大学教育研究所報, 35.7-12
- 文部科学省：新学習指導要領・生きる力
http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/index.htm
- 文部科学省（2009）：特別支援学校 教育要領・学

習指導要領

文部科学省：特別支援教育 交流及び共同学習

http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/tokubetu/010.htm

徳田克己・水野智美（2005）：障害理解－心のバリアフリーの理論と実践. 誠信書房

全国特別支援教育推進連盟（文部科学省委嘱）（2007）：よりよい理解のために 交流および共同学習事例集. ジアース教育新社

Summary

The kindergarten, elementary, junior high and special support schools operated under the Faculty of Education and Human Studies, Akita University, comprise one of the few examples of affiliated schools in the country that provide an integrated educational environment due in part to their close physical proximity. This study examines the accomplishments of the continuous exchange program run between the special support school and the kindergarten, elementary school, and junior high schools, respectively, as they make the most out of their rare surroundings.

Key Words : University affiliated schools and kindergarten, exchange activities, normalization, special support school

(Received February 14, 2012)